東洋大学学術情報リポジトリ　Toyo University Repository for Academic Resources

国家史の言説と文化の担い手としての少数民族 -ベトナムのチャム族の場合-

著者	中村 理恵
著者別名	NAKAMURA Rie
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	55
ページ	45-56
発行年	2021-01
URL	http://doi.org/10.34428/00012446

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

国家史の言説と文化の担い手としての少数民族
――ベトナムのチャム族の場合――

中　村　理　恵

キーワード：チャム，チャンパ，文化のエージェント，国家史の言説，文化の発信

はじめに

本稿はベトナムにおける少数民族の文化と，文化の担い手としての少数民族の関わりをチャム民族を例に，過去20数年に遡って考察したものである。

1990年代の前半，少数民族の文化は，稚拙で劣っているというように見なされていた。しかし，ドイモイ後の観光ブームにより，少数民族の文化，例えば織物，工芸品，歌や踊りは，ベトナムを象徴するものとして一躍脚光を浴びるようになる。それまで周縁化されていた少数民族の文化が，ベトナムの主流の文化となるにつれ，少数民族の文化は商品化され，文化の担い手としての少数民族は，自らの文化から疎外されるようになった。チャム民族の伝統的な文様を施した手織りの布は工場で生産され，チャムの踊りは，キン族（ベト族）によって踊られ，彼らの信仰の場である塔（ビモン）は，観光客に開放され，チャムの神には，キン族の伝統である線香や花が供えられるようになった。チャムの文化は，ベトナムの伝統の一つとして主流化されたのに，それを担うはずのチャム族自身は，文化のエージェントとしての地位を失いかけつつあった（中村2011）。

しかし近年，ここに新しい動きがみられるようになった。少数民族自身が文化の担い手として公の場に登場し始めたのである。チャムは彼らの歌と踊りを披露し，機織り機を使って布を織ってみせ，博物館や史跡で民族の歴史や文化を説明するようになった。これまでベトナムは，大越によって滅ぼされたチャンパ王国と，その民として国土を失い少数民族となったチャム族の関係を，曖昧にしてきたのだが，中部ダナン市のチャンパ芸術を紹介するチャンパ彫刻博物館は，新たにチャム族の民俗資料の展示に加えるようになった。また，ベトナムの古都フエ市では，阮朝の工芸品を展示する博物館に隣接して，チャンパの彫刻を展示する小さな展示室が設けられた（Nakamura & Sutherland 2019）。本稿では，これらの新たな動きを考察して，そこから少数民族と国家の関係を読み取ろうと試みた。

チャム民族とチャンパ

チャム民族は，ベトナム政府が定める国内の54民族の一つで，2019年の国勢調査によると，現在約178,000人がベトナム南部に居住している。チャム族は一般的に，ベトナム中部に興った海上交易で栄えたチャンパの主要民族と考えられている。言語的にはマラヨポリネシア語族に属し，サンスクリットから派生したアカル・タッという独自の文字を持っている。ベトナム中南部のニントゥアン省やビントゥアン省のチャムは，土着化したヒンドゥー教とイスラーム（バニ教と呼ばれる）による伝統宗教を信奉し，現在でも12世紀~17世紀にかけて建造されたヒンドゥー教の寺院で，神格化された王を

祭っている。

ベトナム中部には，レンガで作られたチャンパの遺構が点在するが，最も有名なものは，1999年にユネスコによって世界遺産に登録された，ミーソン遺跡群である。ベトナム中部最大の都市ダナンより西南方向70キロに位置するこの遺跡群には，年間平均40万人以上の観光客が訪れている（Dtinews 2019）。

2世紀に興ったチャンパは，中国への中継港と，中央高地からもたらされる良質な香木などの貴重な産物によって繁栄したが，南進してくる大越との抗争によって次第に勢力を失い，19世紀に完全に自治権を失って，東南アジアの政治地図から姿を消した。大越との間に繰り返された戦いにより，難民として山岳地帯や海に逃げたチャンパの末裔たちが，現在東南アジアの国々で少数民族として生活している。チュオンソン山脈を超えて現在のカンボジアに逃げたチャムが最も多く，推定で70万人以上のチャムが，カンボジアに存在している。最近では海に逃げ場を求めたチャムの末裔の研究が進み，ベトナム近海に住む漂海民，南シナ海に住む人々の中にチャンパやチャムの影響がみられることが分かってきた（E. Roszko 2016）。

1975年に南北ベトナムを再統一し，民族の融和と団結を国是としてきたベトナムにとって，チャンパとチャムは少々厄介な存在である。チャンパの終焉によって，チャムがベトナムの国土に少数民族として存在しているという事実は，なるべく触れずにそっとしておきたい問題である。

B.ロックハートによると，南北再統一以前にハノイで，1950年代から1960年代に出版されたベトナム史では，チャンパは大越の攻撃によって滅んだというように，チャンパに同情的な記述がみられた。1970年代にはいると，チャンパに対する大越の軍事進攻の記述は，最小限度にとどめられ，1980年代の歴史研究では，チャンパの大越への併合が記述されてはいるものの，それは好戦的なチャンパに対する大越側の，自衛の結果であると説明されている。最近の歴史研究は，チャンパの終焉と大越への併合をもっと踏み込んで述べるようになったが，議論の中心は大越とチャンパの抗争ではなく，ベトナムの文化とチャンパの文化の混種となっている（Lockhart 2011：16-22）。文化混種の担い手としてのチャムとその文化が注目される一方，彼らが少数民族という地位に甘んじることになった歴史的顛末は，さらりと触れられるだけである。

これまで，チャンパの民としてのチャムの文化や歴史が，博物館で展示されることはほとんどなかった。チャンパのものは美術品として，チャムの人々のものは民俗資料として区分され，それぞれ博物館や資料館で展示されてきた。

ベトナムの歴史遺物が，多くの場合黎朝，阮朝などの王朝毎に分類されて展示されているのに対して，チャンパの歴史遺物や彫刻は，チャキュウ様式，ミーソン様式などと美術様式によって分類されており，王朝の編年表などと対比されることはなく，歴史とは切り離され，美術品として展示されている。チャンパの歴史遺物の展示に特化しているダナンのチャンパ彫刻博物館は，「彫刻」をその館名に含むように，チャンパの秀逸な彫刻群を展示している。しかし，そのような美術品を生み出した社会や，その社会の政治的背景は，展示の説明には一切含まれておらず，チャンパを構成していたのは一体どういう人々であったのかという記述も見られない。

遺跡の展示でも，チャンパとチャムの関連性が強調されることは極力避けられてきた。ベトナム中部に点在する，レンガで作られたチャンパの遺跡群は，観光資源として注目されるようになり，朽ち果てるままに放置されていた古い塔や寺院は，その方法の良し悪しは別として，修復され整備されるようになった。しかし，それらの建造物を作り上げたのが誰なのかについては，ほとんど言及されてこなかった。

チャンパとは切り離されて，民族博物館や民

族展示室で紹介されているチャムの文化の展示は，住居，衣服，経済活動，儀礼，などの各テーマに沿った時間軸のない平面的なもので，歴史的視点が欠落していることが多い。ベトナムによって滅ぼされたチャンパ，その末裔で少数民族としてベトナムに住むチャム，この両者の結び付きは民族国家の融和と団結に不調をきたしかねない「危険なリエゾン」であり，意図的に無視されてきたと言える。

主流化する少数民族の文化と少数民族の文化からの疎外

1993年に，私がベトナムでフィールド調査を行っていたころ，少数民族の手による工芸品は，肯定的な評価を受けていなかった。当時ベトナムの人たちは，手作りの陶器の食器よりも，工場で大量生産されたプラスチック製の食器をありがたがり，少数民族の手織りの布よりも，工場で生産される布をモダンな製品として好んだ。ところが，1994 年になるとその状況は一変する。この年，ホーチミン市で女子学生や女子高校生が，チャムの伝統的な手織りの布で作ったバックを肩から提げて歩く姿をよく見かけるようになった。1994年というのは，ベトナムを訪れる外国人の数が，顕著に増加した年であり，（L. Kennedy & M. Williams 2001：139）彼らが少数民族の手工芸品に興味を示し，その主な買い手となった。ベトナムの若い世代は，敏感に外国人観光客の「好み」を察知し，短期間の間にそれを受容したのであった（中村 2011）。

少数民族の布や手工芸品は，ベトナムの重要な「商品」となってきたのである。中部高原の有名な避暑地，ダラットで会ったコホー族の男性は，少数民族が織った布を背負って，ホテルからホテルを回り行商していた。布を買ってくれるお客の多くは外国人観光客だったが，売れ行きは芳しくないようだった。1 年後，私はダラット市場の一角で，外国人観光客に囲まれている彼に再会した。私に気が付くと，「今じゃ，回って歩かなくても，観光客の方から私の方に布を買いに来てくれる」と言って笑った。ハノイでは少数民族の収入の向上に取り組んでいるNGO「クラフトリンク」が開催する，少数民族の手織りの布や刺繍を販売するバザーが外国人居留者に大人気で，一枚の布をめぐって争奪戦まで繰り広げられていた。

このように，少数民族の手工芸品や文化が「ベトナムの文化」として注目され，商品化されるようになると，少数民族が創作の過程から疎外されるという現象が起った。例えば，2000年代に入ると，ベトナムの様々な観光地でチャムの布で作ったバックなどが土産物として売られるようになる。これらの土産物を作るために使われたチャムの布は，チャムの村で織られた手織りの布ではなく，チャムの織物の文様を使い工場で大量に生産されたものであった。また，今や，チャム文化の代名詞ともなっている，アプサラの踊りは，キン族の振付師の手によって「かつてチャンパの宮廷では，このような舞踊が踊られていたのであろう」との想像によって，創作されたもので，ほとんどの場合，キン族の踊り手によって踊られている（中村 2011）。チャムの重要な儀礼であるカテは，その地域の文化情報局が主催し，チャンパの王を祭った寺院も文化情報局の傘下の博物館の管轄となり，供される供物などが，徐々にベトナム化してきている。チャムの文化は商品化されて脚光を浴びる一方で，チャム自身は文化のエージェントとしての地位を失いつつあるかのようであった。

ところが，英国のArts and Humanities Research Council とEconomic Social Research Councilの助成金を受けた研究プロジェクト「Reframing Centuries of Cham Forced Displacement」（助成番号ES/P004644）のための調査で2017年にベトナムに行ったときに，この流れに対抗する変化を発見した。以下，チャンパがベトナム史の一部であると受け入れられ，チャンパとチャンパの末裔としてチャム社会の連続性が示唆され，さらには少数民族であ

る彼ら自身が，チャム文化のエージェントとして地位を取り戻しているという現象を考察する。

ベトナム史の中のチャンパとチャムの関連性の可視化

ベトナムの歴史学者，特にベトナム中部の歴史を研究しているものなら誰でも，ベトナム中部の社会と文化は，先行して存在したチャンパのそれを下地にしていると認識している。しかしながら，これまで，ベトナム最後の王朝であり，チャンパの息の根を止めた，阮朝の都であったフエにおいて，先行していたチャンパの存在を示唆する展示や資料館はなかった。

ベトナムの最後の王朝，阮朝（1804-1945）の都でユネスコの世界遺産に登録されている，ベトナム文化の首都ともいえるフエ市の宮廷骨董博物館が，その一角に小さなチャンパ彫刻の展示室を2016年にオープンさせた（写真１）。一部屋しかない小さな展示室ではあるが，はっと息をのむほど美しい男神の立像が見学者を迎える（写真２）。展示品はフエ市周辺で発見されたチャンパの彫刻のコレクション，Section de Chamの一部である。フランス人によって集められたこれらの彫刻は1923年にフエの宮廷骨董博物館が開設されると，そこで展示されていたが，1945年に第一次インドシナ戦争が始まると博物館は閉鎖されてしまう。2000年代の初頭にSection de Chamを復活させて展示しようという動きがあったが，コレクションがフエの宮廷骨董博物館の展示としてふさわしくないとして，実現されなかった。コレクションが再び公開されるようになったのは，チェンマイ大学の大学院で文化人類学の学位を取得した新しい館長を迎えてからである（Nakamura & Sutherland 2019）。

古都フエの宮廷骨董博物館におけるチャンパ彫刻の展示は，ベトナム文化の他に別の文化がフエの地に存在していたことを示唆する。Section de Chamの展示では，チャンパと阮朝の抗争など，政治的な事柄の説明は一切なく，高度に発展したチャンパ芸術の卓越さが強調されている。しかし，ベトナムの伝統文化を象徴するフエの阮朝宮廷骨董博物館の敷地内に，Section de Champaのコレクションが展示され

写真１　フエ宮廷骨董博物館の敷地内にあるSection de Chamの展示室（中村理恵撮影）

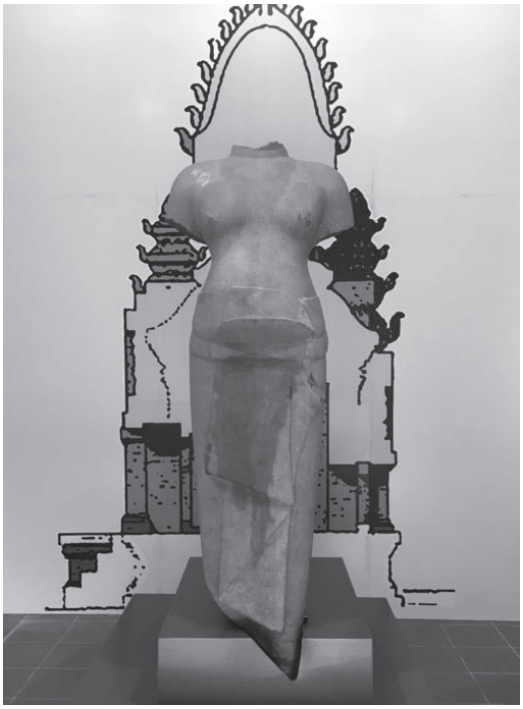

写真２　Section de Chamのコレクションの男神（神格化された王？）立像（中村理恵撮影）

たことによって，それまでベトナムの歴史と文化の下に隠されていたチャンパの層が静かに明かされた。そして，その事実はベトナムの国家史の言説に柔軟性や「異種」を取り込む寛容性がみられるようになるかもしれないと推測させる（Nakamura & Sutherland 2019）。

チャンパがベトナム史の中で可視化され始めてきたことに関連して，チャムとチャンパの関係性も可視化され始めている。現存するチャンパの遺跡で最も有名なものは，ダナン市の南西，トゥボン川流域に造営されたミーソン遺跡である。南に聖なる山，マハ・パルヴァタを望み，四方を山に囲まれた盆地にあるこのヒンドゥー教・仏教寺院群は，４世紀から13世紀にかけて建てられた約70のレンガ造りの寺院からなり，シヴァ神が厚く信仰されていた。1985年の発掘調査で，王の埋葬施設と考えられるものが発見されており，信仰の場だけではなく，王の埋葬地であったとも考えられている（重枝 1994, 10；重枝・Tran Ky Phuong 1997：70-73）。

ユネスコによって世界遺産に登録されたミーソン遺跡を訪れる観光客は増加しており，ベトナム中部の重要な観光資源の一つとなっている（Ditinews 2019）。2018年にミーソン遺跡を訪ねた時，これまでにはなかったチャンパの民としてのチャムが存在していることに気がついた。ミーソン遺跡の出入り口には，チャムの衣装を着て扇子を持ち一列に並んだチャムの踊り手の写真が「See you again」の文字とともに，訪問者を見送っている巨大なパネルが設置されていた。遺跡内には，チャムの織物を実演販売している一角があり（写真３），織り手は織物で有名なチャムの村，ミイギェップ出身の女性で，夫と一緒にここで働いているという。夫は，アプサラの踊り等のチャムの芸能を紹介する遺跡内に設けられたステージで，チャムの楽器を演奏していた。

歴史的なチャンパの遺跡や遺構とチャンパの末裔として少数民族になったチャムが並列的に表象されているのを見たのは，この時が初めて

写真３　ミーソン遺跡内でのチャムの機織りの実演販売（中村理恵撮影）

であったので非常に驚いたが，調査を進めるにつれて，ミーソンの例は特別なことではなく，チャンパの末裔としてチャムが表象されることは，珍しいことでないばかりか，それが今や観光におけるトレンドであるということが見えてきた。

海岸のリゾート市として，古くから有名なニャチャンにあるチャンパの女神ポ・ナガ―を祭った寺院は，遺跡公園として整備され，大勢の中国人観光客でごった返していた。その小さな広場でチャムの踊り手と楽師がチャムの芸能を披露しており，大勢の観光客がその様子をカメラやビデオに収めていた（写真４）。寺院の傍らでは，ニントゥアン省から来たチャムの家族が供物を供えて，ポ・ナガ―に祈りをささげ

写真 4　ポ・ナガーでのチャムの踊りの実演（中村理恵撮影）

写真 5　ポ・ナガーに祈りを捧げるニントゥアン省のチャムの人々（中村理恵撮影）

ている（写真５）。それはさながら，歴史的建築物，文化的建築物として政府が管理下に置いているチャンパの歴史にチャムが戻ってきて，再びそれらの遺跡，遺物，遺構に息を吹き込んでいるかのようであった。

1915年にフランス人によって設立された，ダナン市のチャム彫刻博物館は，チャンパの秀逸な彫刻群を収蔵する有名な博物館である。1975年以降，博物館はクアンナム省の管轄下にはいるが，2007年に独立して独自の博物館となり，2016-2017年にかけて，大規模な改修を行い，チャンパに先行するサーフィン文明やチャム民族の文化を，その展示に含めるようになった（Von Van Thang 2018：12-17）。二階の比較的広いスペースがチャムの民族資料，衣服，土

写真 6　チャム彫刻博物の新しいチャムの民族資料の展示（中村理恵撮影）

器や織物などの手工芸品，祭礼に使われる楽器，儀礼の様子の写真の展示にあてられていた（写真６）。博物館の一階では歴史的なチャンパの遺産を，二階ではその末裔であるチャムの文化を知ることができるという具合である。チャンパが消滅し，チャムが少数民族となった顛末についての説明はないが，チャンパとチャムの関連性を明らかにしているという点で，彫刻博物館の新しい展示は革新的であり，ベトナムの国家史の言説における変化を覗わせる（Nakamura & Sutherland 2019）。

発信するチャム：文化のエージェントとしてのチャム

少数民族としてのチャムはこれまで，展示され，説明され，研究される存在だった。しかしチャンパとの関連性の中で，チャムが語られ，表象されるようになってくると，チャムは彼らが誰であり，チャンパとは彼らにとってどういう存在であるかを語り始める。チャム自身が，文化の担い手として，彼らの言葉で彼らの文化や歴史を発信するようになってきたのである。

チャムが最も多く住んでいるニントゥアン省や，ビントゥアン省にある，チャムの資料館におけるチャンパの美術，チャムの民族資料の展示は，主流の博物館や資料館の展示とは異質な視点を持っている。

ニントゥアン省のチャム文化研究センターには，ポ・クロン・ゲライ寺院の中に祀られているリンガとヨニの複製の展示がある。リンガと

写真７　チャム文化研究センターのポ・クロン・ゲライの内部のレプリカ，正面向かって左側にナンディンの石像が置かれている（中村理恵撮影）

ヨニのセットは木製の天蓋の下に安置され，聖なる牛ナンディンがリンガとヨニのセットの方を向き，見学者に対してお尻を向ける形になって展示されている（写真７）。他のチャンパの彫刻を展示している博物館では，このような展示方法は取られていない。研究センターの展示は，ナンディンの彫刻を美術作品として捉えているのではなく，聖域を構成する宗教的な役割を持つものとして扱っている（Nakamura & Sutherland 2019）。

ビントゥアン省にあるチャム文化センターは，2010年に開設された。その建物はチャンパの寺院を模倣しており，入り口にはシヴァ神の像が展示されている（写真８）。これは，チャムの儀礼において，まず寺院の入り口，破風に彫り込まれているシヴァ神の像に水をかけて祈りを捧げるという，チャムの伝統的な儀礼の流れを踏襲して展示を行っているからだと考えられる（Nakamura & Sutherland 2019）。

ビントゥアン省とニントゥアン省のセンターの展示のテーマは，チャムがチャンパの伝統を今に受け継いでいるという「継承・継続」である。

ビントゥアン省のチャム文化センターの展示

写真８　チャム文化センターの正面玄関に安置されているシヴァ神（中村理恵撮影）

物の解説文は，チャム語，ベトナム語，英語の３か国語で書かれており，多数の儀礼に関する品々が，儀礼を執行している僧の写真とともに展示され，チャンパの伝統が今も受け継がれていることが示されている。展示には，チャンパの王家の血筋を引く女性の写真（数年前に残念ながら亡くなられた）や，現代を生きるチャムの写真，チャムのテレビアナウンサー，学校から出てくるチャムの生徒，手術中のチャムの外科医などの写真があり，チャンパと現在のチャムとの連続性が強調される展示になっている。この点でチャム文化センターの展示は，「過去の遺産」を強調するダナンやその他の博物館の展示とは大きく異なっている（Nakamura & Sutherland 2019）。

ニントゥアン省のチャム文化研究センターは1993年に設立されたが，最初はキン族の官僚や研究者が中心となって運営しており，「特筆すべきような研究活動を行ってはおらず，出版物すら出していない」と，チャムの知識人達から批判を受けていた。チャム出身で画家でもある

ダング・ナング・ト（Đàng Năng Thọ）がセンター長に就任すると，彼はセンターの展示を一新した。

一階の展示室には，チャンパに先行するサーフィン文化の考古学資料が展示され，展示室の二階には，チャムの文化を紹介する品々が展示された。チャムの歴史の古さと，現代にまで残るチャンパの伝統の持続性を示唆する展示になったのである。文字文化の発展を示す展示では，サンスクリットに由来するチャム文字が，パームリーフ，和紙（ライスペーパー），西洋紙にそれぞれ書かれたものが並べて展示されており，チャンパの伝統が過去から現代に受け継がれていることが示されている。

研究センターの二階の展示室には非常に興味深い一枚の写真が展示されている。その白黒の写真には二階建ての建物が写っているのだが，（写真９）その建物こそが，フランス人のカトリック司祭ジェラルド・ムサイ（Gerard Moussay）によって設立された，最初のチャム文化研究センターであった。

ムサイ司祭はチャムの文化を研究して1971年にチャム語・ベトナム語・フランス語辞典を出版し，チャム研究に多大なる貢献をした。チャムは，カトリック教徒であるこのフランス人をチャム文化の理解者・擁護者として愛し深く尊敬した。

写真９　ムサイ司祭によるチャム文化研究センターの写真（中村理恵撮影）

しかし，彼は南ベトナム政権下で活動したが故に，ベトナム政府によって「要注意人物」と見なされ，公に彼に関することを述べることはタブーとなってしまった。南北ベトナムが再統一された1975年以前のチャム社会に関する情報は，今も政府によって注意深く統制されている。特にチャムと外国人の結びつきは非常に微妙な問題である。というのは，CIAによって支援されていたと解釈されることが多い，チャムが関与した少数民族の独立運動FULRO（*Front Unifié de Lutte des Races Opprimées*）との関係を疑われるからである。したがって，フランス人が設立した最初のチャム文化研究センターを，展示において紹介するなどと言うことは，センター長がキン族であったときは，想像すらできないことであった。

しかし，チャムの人たちにとって現在のチャム文化研究センターは，ムサイ司祭が設立したチャム文化研究センターを引き継ぐものとして認識されており，二階の展示室の一角にひっそりと飾られているこの一枚の写真は，チャム文化研究センターに対するチャムの人々の「思い」を反映しているといえる。さらに，チャム文化研究センターはそのようなチャムの人々の「思い」を発信する場所となっているということも注目される（Nakamura & Sutherland 2019）。

ビントゥアン省のチャム文化センターと，ニントゥアン省のチャム文化研究センターの展示のテーマは，伝統の継承やチャンパの伝統を今に伝えているチャムの人たちであり，チャム民族の視点に立った展示をしている。このような展示が二つのセンターで可能なのは，これらのセンターがチャムの人たち自身によって運営されているからである。ニントゥアン省のチャム文化研究センターには多くのチャムの研究者が働いており，ビントゥアン省の文化情報局には，チャムの官僚が働いている。

ニントゥアン省のチャム文化研究センターを訪れたとき，若いチャムの研究員が展示品の説明を英語でしてくれた。少数民族の文化が脚光

を浴び始め，主流化し，商品化され始めたころ，少数民族は自らの文化から疎外され，彼らの文化が他者によって展示され，説明され，売られることに甘んじていた。しかし，このチャム文化研究センターでの出来事は，チャムが自らを説明することによって，文化のエージェントとしての地位を回復しているということを示唆している。

同様なことを別の場所でも体験した。文化研究センターから，ポ・クロン・ゲライの寺院を見学に行ったのだが，チャムの伝統衣装をまとった女性が観光客に囲まれていた。彼女は，ベトナム語で寺院の歴史を紹介し，観光客の質問に答えて，チャムの文化や慣習について説明していた。彼女は省の博物館の職員で，バニ教徒のチャムであった。自分の日々の生活を例にとって，チャムの社会や文化を説明する彼女の話は，非常に興味深かった。チャムは今や，研究され展示されるのではなく，自らが自分たちの文化や社会について語る様になったのである。

チャムがチャム自身を語るのに，芸術活動は重要な役割を果たしている。キン族の画家たちが少数民族を題材にすることがあるが，彼らが描く少数民族の人々は，自然の中で伝統的な暮らしを守るエキゾチックな他者として描かれることが多い。このような絵画は見る人に，近代化される前の古いベトナムの農村風景を連想させ，ある種のノスタルジーを喚起する（中村2011）。

それに対して，チャム人の画家，ダング・ナング・トの作品は，内からの視線，エミックな視点から描かれている。彼の作品の多くは，中国の陰陽の概念に似たアワル（*Awal*）とアヒィル（*Ahier)*というチャンパの故地，かつてのパンドゥランガに住むチャム民族独自の世界観に基づいて描かれており（Nakamura 2009），彼の作品の中に隠された「文化の記号」を読み解いて，メッセージを「解読」することができる鑑賞者と画家との間に親密さを生み出すという効果がある（中村2011）。ダング･ナング･トは，チャムを「少数民族」として描写，語るのではなく，チャムのシンボリズムを「語彙」として使用し，チャム社会とその文化からのメッセージを発信しているのである。

インターネットは，チャムが自らの社会を語り，文化を紹介するのに大変大きな役割を果たしている。多くのチャムの人々が自分のフェイスブックを持ち，そこに日々の暮らしや思うことを掲載し，チャムの文化や歴史を紹介している。その中で私が注目したのは，マイリー（Maily）というニントゥアン省のバニ出身の女性のサイトと彼女の活動である。マイリーはその服装，髪形，アクセサリーに至るまで，自分がチャム族出身であるということを暗示させるようなものを身に付けている。2016年にホーチミン市で，チャムの民族衣装を着て市内を闊歩するというプロジェクトを行い，観光客やキン族の学生などがこのプロジェクトに参加して，楽しんだという。

チャムであることを前面に押し出し，なおかつそれを利用するかのようなマイリーの行為は，以前の都市部に出てきたチャムの人たちの態度とは一線を画すものがある。1990年代中頃に出会ったホーチミン市に移り住んできた中南部のチャムは，自分が少数民族であるということを隠し，ひっそりと生活していた。マイリーにとってチャムという少数民族であることは，彼女の「個性」であり，ユニークなことであって，秘密にしておきたい恥ずかしいことではないのだ。

マイリーは，独学でチャムについて調査・研究をし，彼女と同じバニ教に似た宗教を信仰している人たちが，カンボジアにいると聞いて，カンボジアにまで足を運んでいる。研究の成果は，記事や本にして発表し，講演会でチャムの文化を説明し，踊りのデモンストレーションをすることもあり，招かれて日本でもチャムの踊りを披露している。

彼女は年間300万人以上の環境客でにぎわうホイアン市で（Vietnam Investment Review）

写真10　チャンパ・アマルヴァティ・ハウスのマイリー（チャンパ・アマルヴァティ・ハウスのフェイスブックの掲載から，マイリーの許可を得て転用 https://www.facebook.com/HoiAnChampaEXperience/）

チャンパ・アマルヴァテイ・ハウスを主催し，チャムの文化を体験するプログラムを提供している。参加者は，チャムの食事を堪能したり，マイリーからチャムの文化についての説明を聞いたり，チャムの音楽や踊りを実際に見聞きすることができる。これらのチャンパ・アマルヴァティ・ハウスの活動は，随時フェイスブックで紹介されている（写真10）。

最近，マイリーは自分のフェイスブックに，ポ・クロン・ゲライ寺院が立つ，丘の麓にある付属資料館の前の広場で，宴会が行われている写真を複数掲載し，「ポ・クロン・ゲライの周辺でこのような宴会を催すことは不敬である」と，宴会を許可した地元政府を非難した（https://www.facebook.com/kieumaily.cp）。彼女の掲載した写真と意見文には，多くの人が反応し，100以上のコメントが寄せられた。以前はチャムが公の場で，このように政府を批判したりすることはあまりなかった。ニントゥアン省にあるチャンパの遺跡の一つが，修復工事によって惨憺たる有様になった時でさえ，チャムは何も言わなかった。しかし，サイバースペースはチャムが比較的自由に発言する場を与えてくれている。チャムがどのように自分たちの文化や社会をサイバースペースを使って発信しているかについての系統だった研究は今後に待たなければならないが，興味深いトピックである。

おわりに

文化のエージェントとしてのチャムが可視化され，その活動は多様化し，活発になってきている。「チャムがチャムの語彙を用いてチャム自身を語る」ことによって，正当であると見なされてきた，唯一無二のベトナムの国家史の言説に，変化をもたらすことができるのではないだろうか。

展示を一新したダナンのチャム彫刻博物館を見学したとき，興味深い光景に遭遇した。展示に工夫を凝らすようになった博物館を訪れる見学者は増加しており，ガイドから説明を聞いている観光客のグループが，館内のあちらこちらに散らばっていた。ガイドが使用する言語も，英語，フランス語，中国語，韓国語，日本語と多様だ。日本人のビジネスマンらしい一群を率いてやってきたガイドの説明が聞こえてきた。彼女は流暢な日本語で，「ベトナム中部は，かつてはチャムの人たちの土地であり，ベトナム人（キン族）は，後からこの地に来た」こと，そして「チャムの人たちが後から来たベトナム人に，この地方での暮らし方を教えてあげた」ことを説明をしていた。さすがに，チャンパが滅んだ経緯についての説明はなかったが，「ベトナム中部はチャムの人々の土地だった」という彼女の説明は新鮮で，今や，一つの言説であったベトナムの歴史が，多様化されてきているのだと感じた。少数民族としてのチャムの文化が認識され，その文化の担い手としてのチャムが可視化されることは，国家の歴史が複眼的な視点から語られ始めるということなのである。変化は周縁からもたらされつつある。

＜参考文献＞

Dtinews
2019　More Services Expected to Bring More

Tourists to My Son Sanctuary. Dec. 5. http://dtinews.vn/en/news/024/65413/more-services-expected-to-bring-more-tourists-to-my-son-sanctuary.html（2020年７月14日アクセス）

Kennedy, L. B and Williams, M. R.

2001　The past without the pain：The manufacture of Nostalgia in Vietnam's Tourism Industry. In Ho Tai. H. T.（Ed.）*The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam*. Berkeley and Los Angeles, California；University of California Press. pp 135-167.

Lockhart, Bruce M.

2011　Colonial and Postcolonial Constructions of "Champa". In Trần Kỳ Phương and Bruce Lockhard（Eds.）. *The Cham of Vietnam: History, Society and Art*. Singapore：National University of Singapore Press. pp1-53.

Nakamura Rie

2009　Awar-Ahier：Two Keys to Understanding the Cosmology and Ethnicity of the Cham People（Ninh Thudn Province, Vietnam）. In Andrew Hardy, Mauro Cucarzi, and Patrizia Zolese（eds.）*Champa and the Archaeology of Mỹ Sơn (Vietnam)*, Singapore：NUS Press. pp 78-106.

中村理恵

2011　少数民族の肖像　－　ベトナムにおけるチャム少数民族画家による絵画 東洋大学アジア文化研究所研究年報 46：81-92.

Nakamura & Sutherland

2019　Shifting the Nationalist Narrative?：Representing Cham and Champa in Vietnam's Museums and Heritage Sites. *Museum and Society*. vol.17（1）：52-65.

Roszko, Edyta

2016　Geographies of Connection and Disconnection：Narratives of Seafaring in Ly Son. In Philip Taylor（Ed.）C*onnected and Disconnected in Vietnam: Remaking Social Relationships in a Post-socialist Nation*. Canberra：Australian National University Press pp. 347-377

重枝 豊

1994　チャンパ王国の聖地　チャンパ王国の遺跡と文化展実行委員会（編）チャンパ王国の遺跡と文化: 海のシルクロード 東京：トヨタ財団　pp10-26

重枝・豊　&　Tran Ky Phuong

1997　チャンパ遺跡:海に向かって立つ　東京：連合出版

Vietnam Investment Review

2018　Hoi An Shines in Travel and Leisure's 15 Best Cities in the World list. https://www.vir.com.vn/hoi-an-shines-in-travel-and-leisures-15-best-cities-in-the-world-list-2018-61231.html（2020年７月15日アクセス）

Vo Van Tang

2018　100 years of the Da Nang Museum of Cham Sculpture in Tran Ky Phuong, Vo Van Thang and Peter D. Sharrock（eds.）*Vibrancy in Stone: Masterpieces of the Danang Museum of Champa Sculpture*. Bangkok：River Books. Pp12-18.

（客員研究員／龍沢学館国際センター）

Abstract

The National Discourse and Ethnic Minority People as Cultural Agent:

In the case of the Cham people of Vietnam

NAKAMURA Rie

The article is an endeavor to examine the role of the Cham ethnic minority people in Vietnam as a cultural agent in the past two decays. During the early 1990s, ethnic minority cultures in Vietnam were considered to be “primitive,” or “backward”. After *doi moi*, Vietnam welcomed the booming of the tourist industry. Increasing numbers of foreign tourists fluxed into the country, the ethnic minority items such as handwoven textiles, handicrafts, music, or dance have become popular and are valued as something to represent or to remember Vietnam. Once marginalized Cham ethnic minority culture has been mainstreamed. But the more commercialized the Cham culture was, the more the Cham people themselves were alienated from their culture and they seemed to be losing the cultural ownership. However, in recent years, there are new developments in the ways that Cham people engaging their culture. As a cultural agent, they explain and demonstrate their own culture to others. Their visibility has been slowly altering Vietnam’s national discourse of its history. It provides pluralistic views to the national history.

Key words: Cham, Champa, Cultural agent, National discourse, Transmission of culture,